

森一氏トーク

近藤 本日、劇団俳優座の森一さんのお話の聞き手を務めさせていただきます、東京学芸大学の近藤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、簡単に森さんのご紹介をさせていただきます——「桐朋学園演劇専攻科卒。在学中は千田是也氏、田中千禾夫氏に師事。1978年劇団俳優座入団、千田是也演出作品に多く出演。2000年11月より文化庁在外研修員として1年間、英国王立演劇学校（シェイクスピア・コース、アレクサンダー・テクニク、演出をニコラス・バーター氏）に学ぶ」。僕は近い時期というか、まだ国立大学が国立大学だった頃に、文部科学省の在外研究というシステムがありまして、その最後、2003年の10月から1年間ロンドン大学に行きまして、行ったときは国家公務員、2004年に帰国したときには国立大学法人職員と、身分が変わっていたということがありました（笑）。

森さんの経歴に話を戻します——「帰国後は劇団俳優座演劇研究所にて講師、その後所長を務める。佐藤信氏、デヴィッド・ルヴォー氏等の演出作品に俳優として参加」——今日たぶん何回か名前が出てくると思いますが、佐藤信さん、ご存知の方も多いかと思いますが、もともと俳優座の養成所のご出身で、自由劇場、劇団黒テントで、アングラ演劇の主要な担い手の1人として活躍なさったあとに、近年では公共劇場——世田谷パブリックシアター、それから杉並の座・高円寺——の、それぞれの初代芸術監督を務められ、現在は横浜で、ご自身の劇場を持って活動されています。じつはかつて僕の同僚でもありまして、2000年から東京学芸大学教授として教壇に立っておられました。そういうわけで、共通の知人ということで、このあとお話しますが、信さんが森さんと僕を結びつけてくれたということになります。

森さんは、もちろん俳優としてもご活躍ですが、演出、それからご自身で翻訳もなさっています。最近では、僕も拝見しましたが、この4月、ちょうど桜が一番美しい頃に、目黒川沿いのキンクロシアターという、キンキン・ケロンパでおなじみの愛川欽也さんとうつみ宮土理さんが作られた、小ぢんまりしたいい劇場ですけども、そちらで、ロバート・ハーリングの『ステイール・マグノリアス』を、ご自身で翻訳して演出もなさいました。これは俳優座の役者さんが立ち上げられた ThanKyou! というユニットの第1回公演ということになります。

そういう森さんと今日は、いろいろお話を伺っていかうと思うんですけども、まずはお約束ということになりますが、シェイクスピアとの出会いみたいなことをちょっとお聞かせ願えますでしょうか。

森 その前にみなさんにご挨拶だけ——みなさん、森一でございます。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

近藤 最初のシェイクスピアとの出会いについては、前に伺ったことがありまして、小学校 6 年生のときだった――

森 はいそうです（笑）。

近藤 夜行列車で山形から帰ってくるときに、お父様と本屋に入って『ロミオとジュリエット』を見つけて買ったんだ、ということだったと記憶してるんですが、なんで『ロミオとジュリエット』だったんでしょうかね？

森 その頃、『小学何年生』みたいな本が講談社から出てたと思うんですけど、それに『ロミオとジュリエット』という漫画が出ていて、その漫画で『ロミオとジュリエット』という作品を知って、その文庫本が目の前にあったもんですから、多分、福田恒存先生の訳じゃなかったかな、と思うんですけども、それを「買ってくれ」って言ったら、うちの父は「そうかそうか、読めるんだ、こんな本が」みたいなことで買ってくれた覚えがあります。

近藤 買ってみてどうだったんですか？

森 難しかったです。漢字がいっぱい書いてあって、本当に今の文庫本よりももっと字が小さいですし、紙の質も悪いし。それを最初から読んでいって、寝ちゃって、また頭に戻って、また寝ちゃって、また頭に戻って――そんなことをずっと繰り返して、大学に入る頃まで持っておりましたね。

近藤 小学 6 年生で『ロミオとジュリエット』って、ちょっとおしゃまさんかなという気がするんですが（笑）、どうでしょう？

森 そうかもしれませんね（笑）。やっぱり大人になってからでないと、舞踏会のシーンであるとか、そんなものはもう全然分かりませんで、ただただ、なんて言うかこう、戯曲っていうものを手に入れた――子供のときに、小学校のときに、かならず 1 年に 1 本教科書のなかに戯曲があったんですね。

近藤 そうなんですか？

森 はい、そんな時代があって――あの、頷いてくださる方もいらっしゃると思うんですけど（笑）――そういうのがあって、毎年、僕は国語の教科書をもらうときには、一番それが楽しみで、「今年はなんなんだろう？」と。でも大体、先生はそこ飛ばすんですよ。なんか「こんなのは、まああとで、おうちで読んでなさい」みたいな感じで。僕はずっとそれを楽しみにしてるんだけど、先生は飛ばす。その戯曲が「本」になってて、それが自分の手元にあっ

て、自分が持っていられるっていう、その幸せだけだったような気がします。あまりそんな難しいことはやっぱりわからなかったのかなあって思いますね。

近藤 もうちょっと大人になってからというか、映像でも舞台でもいいんですけども、初めて実際にシェイクスピアを観たっていうのは？

森 私は、大阪で生まれて大阪で育って、大阪の学校に行って、大学っていうか、桐朋学園に入るときに初めて東京に来たんです。その頃、大阪にいて、いわゆる新劇を観るっていうのは、大阪労演というところに入って演劇を観る。今の鑑賞会なんですけれども、そこでこう毎月毎月、会員制になっていて、なにか出し物がある。で、高校2年のときだったと思うんですけれども、劇団俳優座の『オセロ』を観たんですね。『ロミオとジュリエット』の頃からずいぶん経ってるんですけれども——そのあいだに高校生のとき、『ヴェニス商人』っていうのが教科書にありましたね、そういえば。でもその辺はまあ、ずらっと飛んじゃって、本当にこう、劇場で観たのは『オセロ』なんですね。仲代達也さんのオセロで、今は亡き河内桃子さんのデスデモーナ、中野誠也さんのイアーゴ、そういう組み合わせで、それは本当に感動しました。目の前で言葉が語り合われて、3時間ぐらいの長さのものがこう、だーっと流れていくっていうのは、圧巻でしたね。で、あまりにもそれが自分の記憶のなかにあって——その当時、じつはレコードになってるんです。

近藤 レコード！　そうですね。昔はレコードとかカセットとか、映像メディアがまだ個人では所有できない頃に、音声だけが——

森 そうでした。それを、お小遣いを崩して、たしか3枚で6000円だったと思うんですけど——

近藤　すごい高いですね。

森　はい。それを買ってきて、家の自分の部屋に入って、プレーヤーにかけて、部屋のなか真っ暗にして、音声だけを頼りに聞いていってドラマを思い浮かべるっていうのは、もう毎日の楽しみでしたね。

近藤　やっぱりさすがだな。

森　いやいやいや（笑）。

近藤　僕も関西出身なんですけど、僕の関西にいた頃の演劇経験というのは吉本新喜劇しかないですから（笑）。

森 はい、僕も見ました（笑）。

近藤 で、東京にいらっしゃって、俳優座に入れられてということですね。俳優座と言えば千田是也さん——改めてご紹介するまでもないかと思いますが、これ、ウィキペディアの紹介で大変恐縮なんですけれども、「1944 年、東野英治郎、小沢栄太郎、青山杉作らと俳優座を創立、亡くなるまで同座代表を務めた。1949 年に俳優座養成所、1954 年に俳優座劇場を開設し、俳優座のリーダー的存在として活躍した」。ですから 1944 年が俳優座の創立、54 年が俳優座劇場の開設ということで、2024 年が劇団の 80 周年で、劇場の 70 周年ですね。で、劇場は残念ながら先日閉館したと思ったら、そのあと予想外の展開が続いていて、まさか、あの今の話のなんか妙に伏線回収になっちゃうんですが（笑）、吉本興業が居抜きで買っちゃったっていう、ちょっと驚きのニュースが出ましたけれど。

まあ、そういうことがありましたが、ちょうどこの周年を記念して、2024 年の前後 3 年間で、俳優座としてのプロジェクトが進行中で、いろいろな公演をなさってるってということですよ？

森 そうです。大きなテーマとしては、2025 年は「未来へつなげる」っていうことでやっております。

近藤 そのプロジェクトの 1 つが、今日このあとご紹介する予定ですけども、大変話題を呼びました『慟哭のリア』という舞台です。岩崎加根子さん、92 歳ですから、レジェンドが舞台に立った『リア』が昨年ありました。

話を千田さんとの思い出に戻しますが、いろいろあるかと思うんですけども、あとは俳優座さんのシェイクスピアということかというと、今ちょっとご紹介いただきました、仲代さんとかが活躍された時代っていうのが、非常に印象に残る時期かなと。

森 そうですね。

近藤 ちょっと歴史をさかのぼると、その前に——あの俳優座って面白いなと思うんですけど、最初にやっているシェイクスピアが、『ウィンザーの陽気な女房』なんですよ。

森 はい、そうですそうです。

近藤 で、それはやっぱりいかにも俳優座らしいっていうか、千田是也さんらしいっていうか。今日、最初のシェイクスピア協会会長からの挨拶のなかで、「第 1 回のシェイクスピア祭で、三上勲先生が」って話が出てきましたけれども、俳優座の初期の、千田さんの作っているシェイクスピアは、ほぼほぼ全部、三上勲先生の翻訳ですよ？

森 はい、その通りです。

近藤 じつは日本のシェイクスピア翻訳史とか、あるいは上演における翻訳みたいなことを語るときに、意外と皆さんここをスルーしちゃってて、これ日本のシェイクスピア受容研究史のまったく手がついていない、非常に重要な分野の1つなんですけれども、「千田・三神のシェイクスピア」というのは、日本シェイクスピア史において、非常に重要な役割を果たしています。千田さんは、かなり三神先生の翻訳に手を入れられたようですね。三神先生は、「千田さんは持ちまへの凝り性から、われわれの訳をなん度となく読み返し、せりふに手を加えたに違いありません」と振り返っておられます。

森 そうですね。かならず千田先生は。はい（笑）。

近藤 いわゆるテキレジというか、もっと言うところ「翻訳をいじる」というやつですね。で、千田さんの『ウィンザーの陽気な女房』というのは、初演が1937年、新築地劇団時代にまで遡るんですが、やった理由というのは、「古い騎士階級の没落と新興市民階級の勝利」をあの戯曲は歌い上げているんだということで、だから上演するんだということです。

ただ、実際の上演の背景にはおそらく――これは戦前の話ですね。かなり演劇活動が命がけだった時代のことです。三神先生は、「新築地に限らず新劇の劇団は当局の圧迫で追い詰められていた。上演する芝居は禁止になったり、厳重な制限を受けた。しかしいくら乱暴な当局でもシェイクスピアの古典まで禁止するわけにはいきまい」ということで、この作品が選ばれたのだらうと述懐なさっておられます。シェイクスピアは、今でもいろんな世界中の政治的に厳しい状況に置かれている国々において、上演されています。それは、シェイクスピアだったらなんとなく上演が許可されちゃうっていう、西洋の偉大な古典というステータスのおかげで上演ができるっていうので、その結果、じつは世界各地のいろんな厳しい社会状況のところ、非常に政治的な意図が込められたシェイクスピアが上演されているっていうのは、今でも続いていることですが、日本においても、かつてはそういうことがあったということになります。

その後、戦後になってですね、『ウィンザーの陽気な女房』が繰り返し上演されて、俳優座の当たり狂言の1つとなったというようなことを、三神先生が書かれているんですけども、昔の俳優座のシェイクスピアとか、千田さんの思い出とか、なにか、ちょっとご披露いただけるようなエピソードがあれば、ぜひ伺いできればと思うんですけども。

森 この『ウィンザーの陽気な女房たち』は、俳優座としては1952年に三越劇場で、私の生まれる前なんですけれども、上演したのが最初でして、狭い舞台をどうやって使ったんだろうと思ったんです。当時の写真を見ますと――千田是也は、美術家の家でもあって、すぐ上のお

兄さんは、舞台美術の伊藤熹朔さんで、もう1つ上のお兄さんは舞踊家の伊藤道郎さんなんです。で、千田是也は、俳優と演出ってということで演劇の勉強したんですけれども、とても絵のうまい方でした。自分の顔をキャンヴァスに見立てて、もうどんどんいろんなものを、はっつけて、くっつけて、っていう。当時は、綿と卵白を練って、それを糊状にして、鼻をつけたり、ほっぺたをつけたり、おでこをつけたり。それでフォルスタッフっていう役を――これ、写真があるといいんですが。千田は、長いあいだドイツに住んでいた経験があるもんですから、外国人っていうそのくくりのなかで、彼はすごくそういうものを見て育ってきているので、外国人に似せてしまう。だからもう顔も原型なんてないんですね。そうやってこう、メイキャップやら扮装をして。私たち肉布団と言いますが、いろいろな体型を作るために、シャツを2枚重ねて、そのなかに綿を入れてどんどん膨らませていくんです。そういうものを着て、その上から衣装を着て、もう汗だくでフォルスタッフを演じました。これはとても有名になったものじゃないでしょうか。そのときに奥さんであった岸輝子さんのフォード夫人、それから東山千栄子さんのページ夫人っていう、このトリオで大当たりを取ったというような記録があります。

近藤 どうでしょう、森さんご自身が昔出た舞台でシェイクスピア関係は？

森 『ウィンザーの陽気な女房』ですか？

近藤 でもいいですし、昔、1970年代、80年代、90年代あたりのシェイクスピアだとどんな？

森 そうですね、表現的な衣装があるとかっていうのは、これ、多分経済とも関係してると思うんですけれども、どんどん少なくなってきた、できるだけシンプルな舞台、それからシンプルな衣装、あまりゴテゴテと飾らないことっていう、そういうことが中心になってきて、ドラマは動いていったようなんですけれども。

僕は1978年に劇団俳優座に入ったんですけれども、僕の最初は、シェイクスピアの『マクベス』から始まったんですね。で、これはもう千田是也の演出ではなく、増見利清さんという方の演出で、ここからしばらくは増見利清さんの演出が続きます。

それと、同じ年に、千田是也の『アントニーとクレオパトラ』が、これもちょうど劇団創立35周年記念で、国立劇場、半蔵門の方の国立劇場で上演されました。栗原小巻のクレオパトラっていうのが「売り」でお客様を集めたい、そんな時代でしたね。

近藤 それは集まったでしょうね。

森 ずいぶんいっぱいになりましたね。それ、長いあいだやりました。で、地方にも行きましたし。千田是也は舞台装飾なんかもととても凝る方で、そのかわりになんかもう鶴の一声で「ああ、その蛇の尻尾、カットしましょう」って言っちゃうんですよ、舞台稽古で。上下（かみしも）が変わることもしょっちゅうですし。尻尾1個切っただけで20万円飛んだみたいなの。それで舞台部は「今ので20万。これで日の目を見なかった」とか言って。クレオパトラの宮殿の左右にコブラがいて、顔はあるんですけど、その尻尾をカットして。なので、ずっとうねうねした尻尾が舞台袖にありました。袖は広いんで（笑）。

近藤 なるほど（笑）。古い時代のお話も、いろいろお伺いしたいところではあるんですけども、ちょっと時間の都合もありますので、時代を21世紀に進めようかなと思います。さっきもちょっと言いましたけども、森さんと私っていうのはまあ、以前から親しくさせていただいています。そのきっかけになったのが、じつはこれにもシェイクスピアがちょっと関わっています。2006年ですから、もう20年前――

森 そうですね。

近藤 先ほどちょっと名前を出しました佐藤信さんですけども、劇団黒テントでの活動と並行して鴎座という個人活動のユニットみたいなものをずっとやっていたりして、その鴎座っていうのが、ちょっと一時期中断していた。その第2期上演活動っていうのを始めるぞっていうので、その第1弾になったのが、『ハムレット／マシーン』というお芝居です。ご存知の方も多いと思いますが、東ドイツのハイナー・ミュラーという劇作家が、『ハムレットマシーン』という、『ハムレット』を下敷きにした、戯曲ともなんとも取れない、よく分からないテキストを残しています。そのハイナー・ミュラーの『ハムレットマシーン』と、元になったシェイクスピアの『ハムレット』を重ね合わせて上演しようということで、佐藤信さんが企画したのが、この『ハムレット／マシーン』という上演です。で、『ハムレット』部分の台詞を当時同僚であった僕に訳せと言われてまして。その舞台でハムレットを演じてくださったのが、森さんということになります。

『ハムレット』を翻訳するっていうのは、ご想像いただけるかと思いますが、ものすごいプレッシャーなわけです。当然来る人はみんな「アレはどう訳してるんだろう」と思って来るわけですね。一応僕がどう訳したかというのと、「とどまる？ 消えていなくなる？――これが問題だ」って訳して、それを森さんに喋っていただいたんです。

大体『ハムレット』を訳した人は、「自分はなぜ To be or not to be をこう訳したのか」という解説を書くところまでがセットになってます（笑）。僕も上演プログラムに一応解説エッセイみたいなものを書いたんですけども、僕が書いたのは、A or B という英語を、皆さんやっぱ「A か B か」と「か」を入れて訳すんですよ。けど日本語ってそうじゃない？ って

いう。「A? B?」って言う方が普通じゃない?っていうことで、「か」を入れずに訳しました、ってというようなことを書いたんです。僕の『ハムレット』を喋っていただいてどうでしたか?

森 はい、えっとあのまあ、僕、そのあとも先生には助けていただいてるんですけども、僕、思い出すのは、斎藤憐さんの『春、忍び難きを』という芝居がありまして、それを佐藤信さんが劇団俳優座のために演出をしてくださった。それに僕は出ていまして、そのときの縁で佐藤信さんが、「ねえ、ハムレットやってみない」って声をかけてくださったのが、最初なんです。もうまったくいわゆる『ハムレット』ではありませんから。「私はハムレットだった」っていう過去から始まるんですね。で「なんだこれは?」と思いながら、だからなかなか覚えられなくて、もう本当に苦しんでたんですけども。ドイツ語の部分は中島先生ってやっぱり同じ学芸大の先生が訳されて、近藤先生が英語の部分を訳されて。お2人がある日、観にいらしたんです、稽古場に。そしたら近藤先生が「いや、そこはこういうふうに変えた方がいいかもしれない」とかって。で、中島先生も「ドイツ語の部分はこう変えた方がいいかもしれない」ってとても気軽におっしゃるんですね。俳優にとっては「ここまで覚えたものをそうやって変えるの?」っていう。もう本当にもう、あの別にその「締め殺してやろう」とか、そんなことは思いませんが(笑)、本当にもう僕、途中でちょっと休憩いただいて、稽古しているところが廃校になった学校なんですね。だから水飲み場がザーッと並んでる。「水飲み場に行って、僕、ちょっと頭から水かぶって、一回頭を冷やしてきます」とかって言って、そんなふうにながら、でもだんだんだんだん喋っていくうちに、言葉ってというのが、なんかあの面白くなってきたっていうのが印象ですかね。

近藤 ありがとうございます。どうもその節はご迷惑をおかけいたしました。

森 はい(笑)。

近藤 本当、ごめんなさい。そういうある種の非常に実験的な舞台っていうのがありまして。上演された劇場も懐かしいですね。theatre iwato って、当時黒テントが使っていた神楽坂の劇場ですけども、この劇場ももう今なくなっちゃいました。

森 はい。残念ですね。

近藤 そういうお付き合いが一度あって、ただそのあと、しばらくお付き合いはなかったんですけども、2019年の春に大学の方に、ある日突然お電話をいただきまして。そのときに「『マクベス』をやりたいんだ」と。「だから訳してくれないか」っていうご相談をいただいたんですね。

まずそもそも、例えば『マクベス』やるっていうときに、新訳でやろうと思われたのは、なにか理由があったんですか？ 新訳っていうのは、つまりすでにある松岡訳であったり、小田島訳であったりを使うのではなくて、新たに訳し下ろしてそれを使うということです。

森 僕はこの『マクベス』という作品は俳優として劇団俳優座に入って、ほとんど初舞台なんですけれども、そのときに小田島雄志先生の翻訳でフリーアンスという役をやって。そのあと、今度は劇団の外で、TPT という集団でデヴィッド・ルヴォー演出、松本幸四郎さんと佐藤オリエさんの『マクベス』がありまして、それにも僕出てたんですね。で、そのときは松岡和子さんの訳だったんです。どちらの訳を読んでも、やっぱり自分がやった作品は、どうしてもそのときの絵が出てくるんですね。これを消すためには、なんか違う言葉でないとこれは難しいなと思っていて。それで佐藤信さんに電話をして「近藤先生にやっていただくわけにはいきませんかね？」って言うてみたら、「電話かけてごらん。きっと喜ぶよ」って言うてくださって。じつはこうこうこうでっていうことを、近藤先生にお願いしたっていうのが、最初の経緯です。

近藤 森さんが俳優座で『マクベス』を上演しようと思われたのには、2017 年に同じく俳優座で演出された『クスコー—愛の叛乱』という作品の影響があったのではないかと思います。先ほどお話したように、1990 年代ぐらいまでは、俳優座はコンスタントにシェイクスピアをやっておられました。そのあとはあまりシェイクスピアのイメージはない劇団が、久しぶりにシェイクスピアをやる。その 1 つのきっかけになったのが、先ほどお名前が出てきました斎藤憐さんのこの戯曲だったのではないかと。斎藤憐さんもある意味、佐藤信ネットワークというか、先ほど言った杉並区の座・高円寺という劇場の初代館長は憐さんです。もう亡くなってしまいましたけど。この作品を 2017 年にやられていて、まあ、これがかなり『マクベス』をやろうと思った前提になっているということでもいいんでしょうかね？

森 はい。いくつか『マクベス』的なモチーフが出てきて、これやってるときにすごくそのモチーフの部分がとても面白かった。じゃあ主演の 2 人で 1 回『マクベス』をやってみたいなあっていうのが最初でした。佐藤あかりと斉藤淳という、うちの劇団の一番台詞の喋れる俳優たちですね。

近藤 僕はあかりさんの大ファンなので、今日はこのあとあかりさんへの愛を語ろうと思ってますけど――

森 そうですか（笑）。

近藤 はい。あの斉藤さんはもちろんなんですけどもね。あかりさんも大変素晴らしい俳優さん、役者さんだと思います。で、あまりご存じないかもしれませんが、『クスコ』っていうのは、あれですよ、あの――

森 自由劇場の吉田日出子さん。

近藤 もともとそうですね。吉田日出子さんの当たり狂言で、自由劇場っていうのは、一番有名なのはもちろん『上海バンスキング』ですけども、『上海バンスキング』に並ぶ2大当たり狂言の1つです。最近はずいぶん再演をされているのかなという感じですね。

簡単にご紹介しておくと、シェイクスピア的なところっていうのは、ヤマベっていう王様がいて、3人の息子がいるというところですね。このあたりはちょっと『リア王』っぽい。今日最後に『リア王』をご紹介しますが、まあ『リア王』っぽいところで、別に長子相続と決まっているわけではなさそうな雰囲気なんですけども、多分長男のアテノが次の王様であろうということで、周りのおっさんたちは、なんとか自分の娘をアテノとくっつけようとしています。そのなかで、ナカナリという男は、妹クスコの娘、ヨマをくっつけようとする。クスコは、ヨマを連れて王様のところに行きます。ところが王様は、娘じゃなくて、お母ちゃんの方に一目ぼれしちゃうと。なんかこのあたりは『タイタス・アンドロニカス』っぽい気持ちになりますけど――

森 ああ、そうですね。

近藤 クスコはもともと「宮仕えなんてしたくない」って言ってた。最後まで娘が嫁入りすることに反対して、一番反対していた人なんですけれども、最終的に折れて娘を連れて宮廷に行ったら、王様、ああまだ王様じゃないですね、王子様に惚れられちゃって、口説かれたらコロッと落ちちゃう。こうなったらちょっと『リチャード三世』っぽい――

森 そうそうそう。

近藤 ーところもあったりして。で、この2人がマクベスとマクベス夫人のようになっていきます。王様が亡くなって、やはりアテノが次の王様に納まるわけですが、ある種の暴君とその妻のような形になっていって、最後は2人が滅ぼされることによって終わる。後半の部分、第2幕は非常にマクベス的展開になるお芝居ですね。

森 そうです、そうです。

近藤 この『クスコ』を上演されて、で、『マクベス』をやろうということになって、お電話をいただいた、と。『クスコ』ではシビウにもいらっしゃってるんですよね？

森 シビウの演劇祭にも持っていきました、はい。

近藤 シビウに行く前にお電話をいただいて、そのあと改めてご連絡をいただいて、「わかりました」ってということで、2019年の夏休みは僕にとっては基本的に『マクベス』を翻訳する夏休みということになりました。で、9月に入って訳が仕上がったので、納品させていただきました。今回、このトークのお相手をさせていただくに当たって、当時のメールを探してみたら、まだ残っていました。なんて書いてたかというのと、「ご無沙汰しております。少し涼しくなってきましたね。さて、『マクベス』という不吉な戯曲（イギリスでは、日本における『四谷怪談』と同じような扱いです。念のため、稽古前にお祓いに行った方がいいかもしれません）の翻訳を、それにふさわしく13日の金曜日にお送りいたします」——この年の9月13日は金曜日だったんですね。

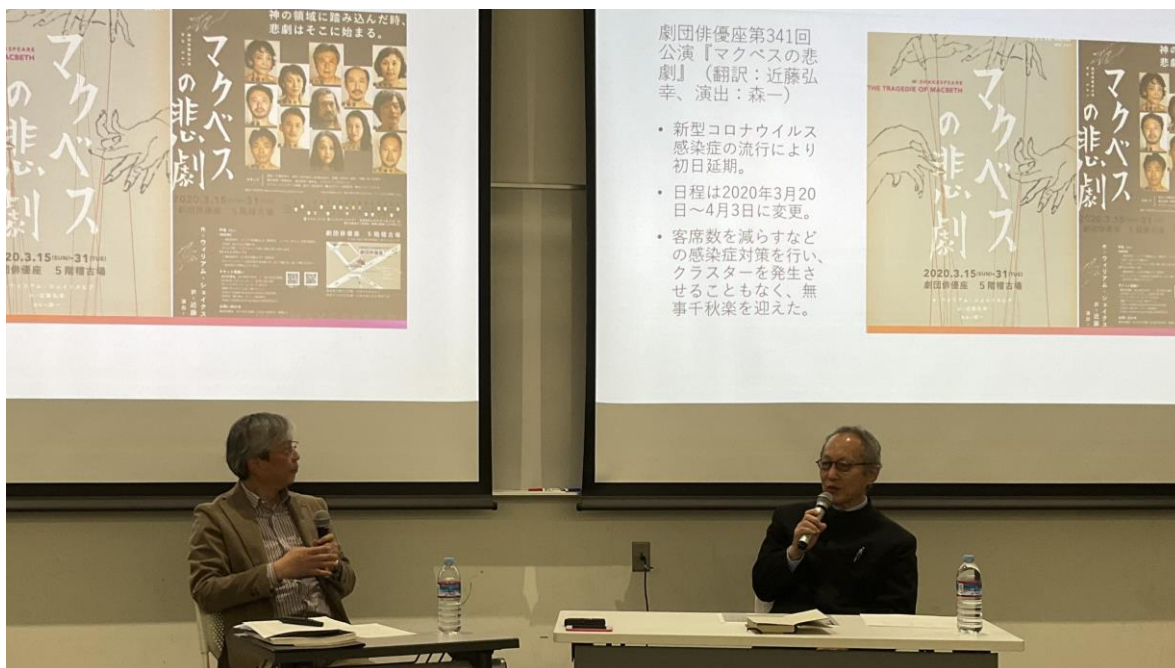
森 すごく覚えてます。

近藤 『マクベス』っていうのは、イギリスではそもそも「マクベス」と言っちゃいけない、っていうか、「ザ・スコティッシュ・プレイ」という言い方をすべきで、「マクベス」と言うだけで祟りが起こるっていう、そういう位置づけのお芝居ですね。結局、実際、本当に稽古前にお祓いもやりましたよね？

森 いたしました。稽古場でのお祓いと、それから公演場所であるうちの劇団俳優座のスタジオでのお祓いと、2度やってます。

近藤 そういう形で実際に公演が動き始めたということになりますけれども、僕の訳を受け取ってお読みいただいたときの感想を伺えますか？

森 はい、あのこれ、とても大きなことなんですけれども。あのまあ、僕は『マクベス』をやりたい。『クスコ』が下敷きになって、今先生がお話してくださいましたけれども、僕はそのときまでは「『マクベス』というお芝居」と考えていたんですね。で、先生が訳してくださったときに『マクベスの悲劇』って訳してくださって。その「悲劇」という言葉をつけてくださったおかげで、「あっ、この男の悲劇を作っていけばいいんだ」というのが、ものすごくはっきりしたんです。で、他のものでも、『ハムレットの悲劇』とかありますけれども、「悲劇」がつくつかつかないかで、全然ドラマのなかの力が変わってくるような気が、僕はすごくしています。「この男の悲劇を作っていくためには、どうしていけばいいんだ」という、ドラマを作る骨格が、ものすごい勢いで出来上がった記憶があります。それは先生にもお伝えしましたが、そこがやっぱり、今までの『マクベス』とは大きく違っていたところですね。



近藤 『マクベスの悲劇』ってタイトルにしたのは、「いやだって、そう書いてるから」って言うだけなんですけど（笑）。シェイクスピアのお芝居を何度か翻訳させていただいているんですけども、基本的に底本、要するに、なにをもとに翻訳するかっていうときに、僕は多くの場合、いわゆるフォリオ版——2つ折り本と呼ばれる、シェイクスピアの死後に出版された全集版——を使います。なので、昔、佐藤信さんと世田谷パブリックシアターでやったときも、『リア王の悲劇』っていうタイトルでやったんですけど、それも「フォリオ版にはそう書いてあるから」っていうだけです。フォリオ版は、じつは全部「悲劇」ってついてるんです。つまり、「悲劇」ってセクションがあって、そのなかに『リア王の悲劇』、『ハムレットの悲劇』っていうふうに並んでいるので、そういうふうに名前がついているというだけのことはあるんですけど、それを僕がそのまま素直に訳したら、そこになにかを森さんは読み取ってくださったということですよ？

森 はい。それともう1つは、先生が訳されたときに、「あなた」っていう言葉が——日本語には、自分の夫を呼ぶときの言葉が少ないんです。英語だと「ダーリン」とかいろんな言葉がありますけれど。日本語には「あなた」しかなかったんですけど、先生は「お前」って訳してくださいましたよ。マクベス夫人がマクベスに対して「お前」っていうんですね。「お前」っていうときは、日本の古い言葉で「お前様」っていうのがありますよね。それととても似通っているような、なんかこう愛がそこにある。で、その「お前」っていう箇所を読むと、ここすごく愛のあふれている場面じゃないか？ シェイクスピアの『マクベス』って、なんか強い奥さんと弱い旦那って言うか、それがこう奥さんに尻を叩かれて、なんか上り詰めていって、

最後2人でドーンと落ちちゃうみたいな、そんなふうにかう取られることが多くて、最初に僕が出たものもまさにそうでした。大塚道子さんと加藤剛さんっていう、この2人のコンビがやったわけですが、もう大塚道子さんって怖くて怖くてしょうがない——もう亡くなったからいいかな（笑）——もう見てるだけで、そばにいても怖いみたいな、鬼婆みたいな方で、いや、普段はそんなことないんですけど、いつか怒るんじゃないか、いつも怖かった。そういう方がやってるもんですから、『マクベス』はそんなふうだと思ってたら、「お前」って、ここ、すごく愛に溢れてるなと思って。最初は愛に溢れた夫婦が、あまりに愛するがために、自分の亭主をあまりにも愛するがために、どんどんなんか、頑張れ、頑張れ、頑張れって言ううちに、こう崩れていく——そんなようなイメージを持ちました。これ、やっぱり先生に「お前」って訳していただいた、あるいは「悲劇」って書いていただいた結果、「個人のマクベスという男が、愛されるがために崩れていく」っていう。なんか、それが僕にはとても、自分では、こんなに愛し合ったマクベス夫妻はないんじゃないかっていう、そんなふうに思いました。

近藤 当然ですけども、英語のものを日本語に訳するっていう場合に、やっぱり代名詞の処理をどうするかっていうのは、これは、翻訳する人間は誰でも考えることなんです。『マクベス』に関しては、ちょっといろいろと、自分なりに工夫したところがあって。1つは、いま森さんが話してくださった、マクベス夫人の台詞です。皆さんご存知かと思いますが、シェイクスピアの時代の2人称には2種類、you と thou というのがありました。で、you はまあ、比較的フォーマルであつたり、thou っていうのは親しい関係だったり、目上から目下に使われるっていうことがあります。シェイクスピアははっきりこの you と thou を使い分けてるんですね。にもかかわらず、なぜか日本語訳ではちゃんと訳し分けてない。だから、それをちゃんと訳し分けてみたらどうなるんだろうっていうのが1つあって。つまりマクベス夫人はマクベスに向かつて you って言っているときと thou って言っているときがあるんです。それをなんかはじめは分かんないけども、とりあえずそのまま「あなた」「お前」と訳し分けてみる。そしたら結構ちゃんと使い分けてるんですよ。さすが優秀な劇作家だと思います、ウィリアムは。

森 あはは（笑）。

近藤 要するに叱咤激励なんですよ。「お前」って言って叱咤して、「あなたはできる子だから」って言って激励するっていう、もうアメとムチで、じつはマクベス夫人はマクベスに働きかけている。そのことをシェイクスピアはちゃんと you と thou の使い分けで表現しているんですね。

ちょっと今からいくつかの場面をご覧いただこうかなと思いますけれども、他にもいろいろ気になるところがあって、もう1つは、マクベスと他の領主たちと関係です。冒頭部分の。どう

も、今までの翻訳は、マクベスが最初から偉すぎるんじゃないの、というところがあって。つまり、このあと王になるっていうことを、なんかすでに先取りした翻訳になっちゃっている。ところが、もちろんバンクォーはそうですけども、ロスとかアンガスとか、ああいう人たちとマクベスって、位が一緒なんですよね。たしかにマクベスはスーパースターですけども、でも、だからって、周りが敬語を使うのもおかしくね？ っていう話なんです。つまり、大谷は確かにスーパースターですけども、だからってチームメイトが「大谷様、ホームランお打ちになられましたね」っていうのはおかしいじゃないですか？ で、実際、英語を見てみると、他の領主たちはマクベスに向かって、やっぱり thou って言ってるんです。だから対等な言葉で訳せばいいんじゃないかって。今からご覧いただくのは第1幕第3場の、ロスとアンガスが、マクベスがコーダーの領主になったということを知らせるくだりです。

俳優座公演『マクベスの悲劇』の舞台映像視聴

近藤 まあこんな感じです。非常に関係性がフラットになっていると思いますけども、多分これが正しいんじゃないかなと思います。

森 懐かしいですね。

近藤 これを観ると思い出すのが、2020年3月、本当にコロナ禍ギリギリで上演したので、感染対策で客席が減らしてありますね。「ちゃんとあいだが空いてるな」と感じます。

次は、第1幕第7場、マクベスとマクベス夫人のラブシーンです。この場面でマクベス夫人は、「あなた」と「お前」の両方を使い分けています。あともう1つ言うと、‘If we should fail?’ ‘We fail?’ っていう台詞です。松岡和子先生なんかは、よくこの部分について言及してらっしゃいます。「ここで主語が we であるってことは、すごく大切なんだ」っていうことをおっしゃっていて、普通、日本語では主語は訳さないっていうことが多いんですけども、ここは we であることが大事だということで、「もししくじったら俺たちは？」「しくじる、私たちが？」っていうふうに訳していらっしゃるんですね。で、それはそれで非常によく分かる考え方なんですけれども、一方でジェンダーの問題が出てきちゃう。主語を訳すことによって、「俺たちは」「私たちが」っていうふうに台詞に変化が出ちゃってる。けども、この台詞はじつはオウム返しであることに意味があるんじゃないかっていうふうに、僕は思うんです。なので言う言葉が変わっちゃいけない、同じ言葉を返さなきゃいけないっていうことで、僕は主語を削って「万が一失敗したら？」「失敗したら？」と訳しています。先ほどの予告を守って「あかり愛」を発露しますが（笑）、ご覧いただくと、マクベス夫人を演じている佐藤あかりさんが、僕の訳した意図を非常に正確に理解して台詞を言ってくださっているということが、お分かりいただけるんじゃないかと思います。どうぞご覧ください。

俳優座公演『マクベスの悲劇』の舞台映像視聴

近藤 こんな形になっています。次は、まさに演出的な見せ場というところで、第2幕第2場、ダンカン殺しを終えた2人のやりとりから第3場の門番の場面までをご覧くださいこうと思います。

俳優座公演『マクベスの悲劇』の舞台映像視聴

近藤 通常、第2幕第2場のあと、マクベスとマクベス夫人は退場するわけですが、この公演では、2人は舞台に残ります。そして、3人の魔女が門番となります。本水が使われた舞台上で、マクベスとマクベス夫人が、手についた血を洗い流そうとする一方で、3人の魔女が入れかわり立ちかわり、その場にマクダフたちが入ってくることを防いでくれるわけです。この演出の面白さっていうのは――通常は隠すための時間稼ぎで第2幕第3場があるわけですよね？

森 はい、はい。

近藤 つまり、マクベスとマクベス夫人が血を落として再登場するためには、当然マクベスとマクベス夫人だけではなくて、マクベスを演じている俳優とマクベス夫人を演じている俳優が、血を落として着替える必要がある。その時間を稼ぐために、あの門番の場面っていうのは存在しているわけなんですけれども、それをこの演出では、わざとその血を洗い流す場面を見せて、2人が犯罪の証拠を洗い流すための時間稼ぎを、3人の魔女が手伝ってやってるっていう、そういう作りになってるってことですよね？

森 そうです、そうです。この門番の台詞っていうのは、シェイクスピアの時代の時事ネタが書き込まれているので、なかなか観客に伝わりにくい。それで今の時代を入れてみたりとか、いろいろなものが分かるように書き換えたりとか、そういうことをする演出が多かったんです。けれども、僕はなんかこう、もっとその、シェイクスピアが書いた血のりを落とす時間を持たしてるっていうのは、それを全部見せちゃった方が面白いんじゃないかなと思って。それで生の水を使いながら、本当に落としていくっていう作業を、俳優たちにやってもらったわけです。

近藤 あとやっぱり舞台の面白いところっていうのは、意図していないところで現実世界とリンクしちゃうってことが起こる。つまり先ほど申しましたが、日本中がみんな手を洗わないきゃいけないって大騒ぎしていた時期に、こうして本水を使って手を洗う場面を見せるっていうことが行われたっていうことになります。

で、それともちょっとつながるんですけども、もう1つご覧いただこうと思うのが、そんな長い場面じゃないんですけども、第4幕第3場、亡命中のマルカムがマクダフに対してスコットランド進軍を表明した直後、イングランド王を絶賛する場面です。

俳優座公演『マクベスの悲劇』の舞台映像視聴

近藤 これはじつは僕のからのリクエストで、この台詞は切らないでほしいっていうふうをお願いをしたんですね。この台詞はあんまり聞いたことないと思います。僕が今まで観た舞台のなかでこの台詞を聞いたことがあるのは、昔、銀座セゾン劇場でジャイルス・ブロックの演出で、江守徹がマクベスをやったものがありましたけれども、あの公演ではこの台詞は切られてなかったんですけども、それ以外の舞台ではほとんど切られています。だけど、この台詞、すごく大事だと思うんですね。これ、このお芝居の結末をどう考えるかということともつながってくるんですけども、つまり最後、マクベスを退治するんですけども、そのマクベスの退治はイングランド軍を引き入れるということによって達成されているわけですね。しかも結末で新しい王様は「これからもうお前らはthaneじゃなくてearlだ」って言って、要するにスコットランドがイングランド化する瞬間が、ある意味描かれているっていうふうにも言えるわけです。そうすると、やっぱりここで逃げているマルカムが、イングランドかぶれで、イングランドの王様にいかにすごいかっていうことを喋る台詞には意味があるんじゃないかと思って、これはカットしないでほしいって言ったら、結果として謎の疫病が大流行して、これもまた時代と見事に響き合っちゃったっていう、そういう偶然が起こったということになります。今言った最後の幕切れもちょっと、ご覧いただきましょうかね？

俳優座公演『マクベスの悲劇』の舞台映像視聴

近藤 最後、マルカムが王様になるが、その王冠を3人の魔女の1人が奪って投げて、暗転、ってということなんですね。この幕切れはどういう意図でしょうか？

森 今、先生のお話があったんですけども、あの、マルカムの最後の台詞っていうのは、雄々しく、格好よく終わるのがよくある形だったんですけども、別に傀儡とまでは言いませんけれども、なにかそういう、「これも操られたもの、なんか不確かなもの」っていう。時代って、つながっていくんだけど、そんなにこう確信をえてつながっていくものではないんじゃないかなっていうような思いがあったもんですから、こういう王冠を投げられて、ふって目を開けたところで明かり落としてもらった、そんなようなものを作ってみました。

近藤 ありがとうございます。いろいろあのコロナの話も含めて、多分この公演の話をしているとも、いくらでも話せるんですけども、ちょっともう時間も迫ってきてますので。

今日もう 1 つご紹介したいのが、最初にも少しお話ししましたが、昨年の 11 月に俳優座劇場で行われました『慟哭のリア』というお芝居ですね。これは『リア王』を明治時代の日本の北九州の炭鉱の町に置き換えていて、リアは女性、3 人の娘が 3 人の息子になっています。この公演に関して素晴らしいと思うのは、こういう翻案物で、依拠した翻訳をちゃんとクレジットしているということです。しっかり松岡和子先生のお名前がクレジットされています。僕も翻訳者の端くれですので、このことをぜひ強調しておきたい。ただ大変素晴らしいんだけど、これ当たり前のことなんだから、「全演劇制作者これをちゃんとやれ」って思います。岩崎加根子さんが、第 59 回の紀伊国屋演劇賞個人賞と第 32 回読売演劇大賞の最優秀女優賞を受賞されたという舞台でもあります。

岩崎さん演じる室重セイという炭鉱主には、龍之輔、正之輔、文之輔という 3 人の息子がいます。この翻案の面白いところは、舞台を日本に置き換えているということだけでなく、セイの亡くなった夫が愛人を作っていて、その愛人とのあいだに善治という子をもうけているという設定になっていることです。この善治が、狂言回しというか、悪者としていろんなちょっかいをかけていって、一家が崩壊していくという話になっていて、つまり『リア王』のメイン・プロットのリア家のお話と、サブプロットのグロスター家のお話が、1 つにぎゅっと圧縮されたような形になっているということです。森さんが演じられたのは、与平という、セイにずっと付き従う使用人です。基本的に、前半は道化のような立ち回りになっているんですけども、後半はグロスターのように目を潰されてしまいます。この役はいかがでしたか？

森 そうですね、一番最近のことですし、僕はとても楽しくこの仕事をさせてもらいました。岩崎さんとこんなに長いあいだ——ほとんど舞台の上、1 場面以外はずっと一緒なんですね。だからお稽古のときからずっと控え室も一緒に、ご飯食べるのも一緒にみたいな。それで加根子さん、あの僕たちは、岩崎さんを加根子さんって呼んじゃうんですけど、加根子さんに「そんなことしてちゃダメですよ。ほら台詞覚えなきゃ」とか言ったり。なんかごそごそしてるなと思って「なにやってんですか？」って言ったら、「ちょっと台詞書いてるの、ここに」。「こんな小さな字で見えるんですか？」って聞いたら「なんかあれば安心するのよ」とか。そういうふうな、なんか「役」と「普段」がこれほど密着した仕事は今まで初めてでした。岩崎さんが 92 歳で紀伊国屋や読売を取られたときに、普段だったらなんかこう嫉妬心みたいなのが生まれてくるのかなと思ったんですけど、受賞されたことが本当に嬉しくて、すぐにメールを送ったりなんかしたような、それぐらい印象的な仕事でした。



近藤 これも映像をご用意していますので、幕切れの部分をご覧くださいと思います。ちょっとあらすじを紹介する時間がなくなっちゃったんですが、長男の龍之輔がセイから炭鉱を譲り受けたんだけど、そこで事故が起こり、すべてを失ってしまったという状況になります。次男の正之輔はもうすでに命を落としていて、死体となって龍之輔のオフィスに運び込まれています。三男の文之輔ももう死んでいるんですが、文之輔の恋人のハルが、すべての悪をもたらした張本人の善治を見つけたと言って、文之輔の死体を背負って入ってくるところから、最後までをご覧くださいと思います。

俳優座公演『慟哭のリア』の舞台映像視聴

近藤 こういう舞台になります。もう本当に時間が迫ってきてしまいましたので、最後に、これシェイクスピアとは関係ないんですけども、次に森さんがご出演になる劇団俳優座公演『PERFECT』という作品ついて、ちょっとお話ししていただければと思うんです。どういう舞台になりますかね？

森 現代劇で、若手作家のなかでもとても注目されている瀬戸山美咲さんという、小劇場ですって頑張ってきた方の書き下ろしの作品です。妊娠したときに胎児が正常かどうかということ調べる出生前診断というものがありますが、その結果を間違って伝えられて、子供を出産した夫婦の物語になります。ダウン症で、複合的な障害を持った子供が生まれてきた、それを私たちはどう考えていくかっていう、命に向き合った、そんな作品でございます。

近藤 劇団創立 80 周年記念事業の一環ということで、ずっと前から告知されていたんですが、当初は『IMPERFECT』っていうタイトルでラインナップされていて、いざ情報公開で、作品のチラシが出てくると、『PERFECT』に変わっていたっていうところが、今のお話じゃないんですけども、インパーフェクトの問題はパーフェクトの問題であり、パーフェクトの問題はインパーフェクトの問題である、ということなのではないでしょうか？

森 はい。人のなかには、パーフェクトなものはないんじゃないかっていう、そういうところをちょっと考えてみようじゃないか、掘り出してみようじゃないかっていう、そういう意図があるようです。

近藤 別に狙っていたわけではないんですけども、「パーフェクトはインパーフェクトで、インパーフェクトはパーフェクト、fair is foul and foul is fair」っていうことで、そろそろお時間も迫ってまいりましたので、このあたりで、今日のお話は終わりにさせていただきたいと思います。どうも拙い司会で大変申し訳ございませんでした。いろんなことをお話しくださいました森さんにどうぞ皆さん盛大な拍手を。

森 ありがとうございます。